

日本に行きます！！

第9期 OG 清水 鈴

日本での交換留学が終わりカナダに帰国してから、もう1年と半年が過ぎようとしています。家族や友達との再開。久しぶりの分厚いステーキや大きな七面鳥を食べて、初めはとても感動していたのを思い出します。しかしながらカナダに戻り、普通のカナダの学生生活を3ヶ月程続けていると日本での1年間の生活が本当に現実の事であったのかどうか定かではなくなってきました。あまりにも自分自身の周りの環境が変わっておらず、元の生活のルーティーンにすぐ戻ってしまっていく中、自分が日本で本当に留学をしていたのかさえ分からなくなってきました。あの「1年」がマボロシかのように思えるときが時々ありました。人に留学経験を話した時に感じるギャップや温度差が違和感となって自分の中に積もり始めている感じがしました。他人の経験、しかも単なる留学経験に感情移入もないのは当然の話です。しかし、私の中では日本での経験は非常に大きな変化であり、とても大切な思い出なのです。それを理解してくれようとした人は誰も無く、とても孤立した気持ちになりました。これがまさに「帰国ショック」というものなのです。



トロントの夏の風景

帰国ショックというのはカルチャーショックと似ていますが、新しい土地に行くのではなく、ホームタウンに帰り、元の生活に戻った際に現れるショック症状です。慣れ親しんでいる土地に再適応しなければいけないことに対して違和感を覚えたのです。留学はテンポラリーな滞在です。テンポラリーであるからこそ、留学先の人々は優しく、親切に異国から来た留学生に接してくれます。帰国すれば「普通の人」に戻るのには当然なのですが、特別扱いしてくれることに慣れてしまった留学生は急に居場所をなくしたような気持ちに襲われるのです。先ほども少し話をしましたが、1年間留学を通して自分は変わり、成長してきたはずなのに、周りの人々はそれについて気付いていないような気がしました。皆、留学する前の「Rin」に期待して接してきます。私の中で何かが大きく変わり、それを理解してほしいのですが、友達の中で私と同じ経験をした人は1人もいないため共感を得ることがとても難しくなりました。共感を得られないことができないということは話が續かない。その結果大学での友達と少し疎遠になったこともありました。その「変化の無さ」がとても寂しいのですが、それを受け入れていかなければならないことも理解しつつ、

普段楽観的な私でも少し悩む時期でした。

日本から帰国して1年が経ち、「帰国ショック」も徐々に薄らいできました。私の中の違和感も消え、普通にカナダでの最後の大学生活を過ごしています。ただ、卒業を前に自分の将来を真剣に考えた時、やはりもう1度日本に戻り、自分を試してみたいと強く思うようになりました。帰国前から小野ゼミ生何人かには日本で働きたいかという話はしていましたが、カナダに戻ってみて確信したのがあります。それは、私は日本人であるということです。カナダもアメリカも多民族国家であり、どのような民族も受け入れる許容性があります。ただ、アメリカは異国から来る人々をアメリカナイズして受け入れるのに対し、カナダはオリジナルの国の文化を維持したままカナダで共に生きることを許すモザイク社会となっています。アメリカのように統一したアイデンティティを強要せず、自由に自国の文化や言語に誇りを持って生きることを認める国がカナダなのです。本当に素晴らしい国だと思います。この様なカナダであるからこそ、今の私があり、私はカナダに住む日本人として成長できたのだと思います。そして日本人度に磨きがかかったのは留学経験に他なりません。

そんな日本人としての自分を、日本の社会で更に磨いてみたいと思うのは、当然の成り行きかも知れません。又、他の日本に住む日本人とは少し違った自分の価値観や考え方を企業や社会で活用しながら、何かを提供できたらいいなとも思うようになりました。日本での仕事は残業も多く、理不尽な上下関係や企業論理のことも聞いています。何より私の生活やメンタリティーをサポートしてくれる家族や友人は絶対的に少なくなります。でも、そのロスを十分カバーできるだけの経験や成長といった自分にとっての「得るモノ」があると思います。

いずれは自分を育ててくれたカナダにも恩返しをしたいと思いますが、まずはテンポラリーではなくパーマネントな形での日本での生活を始め、自分を試してみたいと考えるようになりました。ここまで強く「日本に行く」と言ってしまったからには再来年のOB・OG会には顔が出せるよう就活頑張りたいと思います。



第7期菊盛さんとトロントにて
(著者は左)